

マレーシアにおける社会変動と青年期女性の進路形成
—ジェンダーとエスニシティを分析視点として—

論文概要書

鳴川 明子

1. 問題の所在と研究の目的

本研究の目的は、あらゆる教育段階で男女間の教育格差を解消してきたマレーシアを事例とし、女子・女性の教育機会の拡大および拡充の過程と構造について明らかにすることである。本研究においては、ジェンダーとエスニシティという視点を用いて、社会変動および青年期女性の進路形成意識という、マクロおよびミクロ次元から分析することとした。

人口 2,664 万人（2006 年）を抱えるマレーシアは、マレー人 6 割、華人 3 割、インド人 1 割とその他の少数民族などで構成される複合社会である。そのため、マレーシア政府にとって、これらの多様なエスニック集団間の格差を解消することが最優先課題となっている。特に、そのほとんどがイスラームを信奉するマレー人と、19 世紀後半に移住してきた華人との間に、社会的・経済的不均衡という問題があり、1969 年にはエスニック集団間の衝突が勃発した。マレーシア政府は、その後の衝突を回避するために、マレー人に対して雇用や教育の機会を優遇することによって、エスニック集団間の格差を克服する「ブミプトラ政策 (Polisi Bumiputera/Bumiputera Policy)」(1971 年) を導入した。このブミプトラ政策によって、マレーシアの教育制度はマレー人を優遇するように再編成され、属するエスニック集団に応じて教育機会が配分されるようになった。

マレーシアの教育に関する先行研究の多くは、ブミプトラ政策がエスニック集団間の新たな格差を生み出している点を批判的に検討してきた。それにより、あるエスニック集団にとっては教育機会を拡大するために有益な方策でも、別のエスニック集団にとっては教育機会を狭めることになるという厳しい現実が明らかにされた。しかしながら、既存のマレーシア教育研究の中には、特定のエスニック集団の立場に立つがゆえに客観性を欠く研究が多く、また、エスニック集団による分析に終始するあまり、他のカテゴリーによる格差の構造を見逃してしまっていた。その一例として、ジェンダーによる格差の問題が挙げられる。

マレーシアでは、経済成長に伴って女子・女性の在学者数があらゆる教育段階で増加し、男女の割合が拮抗してきた。しかしながら、その背景を十分に説明する先行研究は未だ多くはない。結論を先取りすれば、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大および拡充が、他のアジアの途上国に比べて早く進行したのは、それらを促進する政策が実施されたからではない。それよりはむしろ、エスニック集団間格差を是正し国民統合を目指す政策や、経済発展を目標とする人材育成策が、間接的に影響を及ぼしたからである。すな

わち、マレーシアにおいて、開発途上の国民国家が抱えるエスニック集団間格差の是正と国民統合、経済開発のための人材育成という 2 つの課題を克服する過程で、期せずして女性の教育機会が増加する結果となった。ただし、教育機会を優遇された対象はマレー人女性に限定されており、華人女性やインド人女性に対する機会は制限されるという、女性内部での格差の問題は残されたままであった。

このように、華人であり女性であるという、2 つの意味でマイノリティである華人女性を取り巻く「二重の差別」の構造の問題を説明するためには、エスニシティとジェンダーに関わる諸問題を別々に論じるのではなく、複合的な観点からアプローチすることが求められる。しかしながら、マレーシア教育研究の多くは、エスニシティのみを主要な分析カテゴリーとして論じており、ジェンダーと教育の問題を十分に扱っているとは言えない。

さらに、エスニック集団間の教育の問題が、ジェンダーと教育の問題にも少なからず影響を与えてきたと仮定するならば、子どもの進路選択に見られるエスニック集団間 (inter-ethnic groups) およびエスニック集団内部 (intra-ethnic group) の格差についても、重層的かつ複合的な観点から検討する必要があると考える。特に、エスニック集団間の格差の問題について、政策分析に留まらず、当事者である子どもの進路形成という側面から実証的に検討し、客観的かつ質的に記述することが望まれる。ところが、マレーシアの生徒および学生の進路選択をめぐる意識や実態について検討する調査そのものの数が少ない上に、それらはエスニック集団別か性別による進路分化を記述するに留まる。

以上のことから、本研究においては、ジェンダーとエスニシティという複合的な分析カテゴリーにより、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大および拡充の過程とその背景について考察するために、次の 2 つの課題について検討することとした。第 1 に、社会・経済・教育政策の変遷に見る社会変動という「マクロ次元」から、女子・女性の教育機会の拡大および拡充の過程と格差を生み出す構造を明らかにすることである。第 2 に、青年期女性の進路形成過程という「ミクロ次元」から、教育拡大の要因や背景を捉え直すことである。ミクロ次元においては、マレー人女性と華人女性とのエスニック集団間の対比と、同一エスニック集団内の対比を通じて、女性の進路形成過程における受容と葛藤(「自己同定」)の意識と実態について国内比較し、マレーシア女性の教育ニーズの多様性を明らかにする。

2. 研究の概要

本研究は、序章から終章までを含めた全7章から構成される。以下、論文の構成に従い、その内容の概略を示す。

第1章「先行研究の分析と批判的考察」

本章では、主要国における女性・ジェンダーと教育に関する調査や先行研究を整理し、そこに見られる女性と教育に関する欧米型の概念モデルについて批判的考察を試みた。取り扱った研究成果の範囲には、比較教育学、教育開発研究、マレーシア教育研究、ジェンダー論に加えて、教育社会学の進路形成論、女子高等教育論、エスニシティ論、イスラーム教育研究なども含まれる。本章で、これら既存の調査や研究を分析し批判的に検討することにより、本研究において次の点を中心的な課題として論じることとした。

第1に、これまで取り扱われることが少なかった途上国の女性を対象とする実証研究を行うことによって、その実態把握に努めること、第2に、マレーシアを事例として、女子・女性の就学率や在学率が上昇してきた要因や背景について整理し直すことである。特に、マレーシアにおける教育政策、社会・経済政策、人材育成策や女性関連政策等の各種政策が、男女間教育格差の解消やジェンダー平等の達成にどのように寄与してきたかという、各種政策のジェンダーの観点からの有効性について検討することは重要である。第3に、既存の教育社会学や教育開発研究において、紋切り型に進学阻害要因とみなされてきた性役割観について解釈し直すことである。第4に、女性の進路形成に関して分析する際に、単にジェンダーと教育の問題に矮小化することなく、他の分析カテゴリーと組み合わせて分析すること、第5に、女子教育開発に関わる国際的潮流の中で、男女間の教育格差が解消されつつあるマレーシアの事例をどのように位置づけるかについて考察することである。女性やジェンダーを扱う比較教育学や教育社会学研究の多くは、日本や欧米の先進諸国を対象としたため、経済発展に伴う教育拡大と男女平等社会の実現という単線型の概念モデルに依拠する傾向が強かった。ところが、女性が性役割観を維持したままで教育機会が拡大してきたマレーシアの事例は、そうした概念モデルの検討を迫るものである。これら本章で抽出した課題について、本研究では、各種政策の分析（第2章）と実証研究の分析（第3章～第5章）により解明することとした。

第2章「マレーシアにおける社会変動と女性の教育機会の拡大」

本章では、マレーシアにおいて、途上国では例外的とも言える規模とスピードで、女子・女性の教育機会が拡大および拡充してきたことの要因や背景について、マクロ次元から検討した。本章で用いた主な資料は、1950年代以降に提出された4つの教育政策文書と、社会・経済政策としての「マレーシア計画」などの第一次資料（マレー語・英語）であった。主要な教育政策文書の公表を分岐点として4つの時期に区分し、各期の政策が、女子・女性の就学率や在学率の向上にいかなる影響を及ぼしたかについて論じた。本章で示した時期区分は、植民地教育政策による女子教育普及期（第Ⅰ期）、政府による国民統合と女子の教育拡大期（第Ⅱ期）、人材育成の重点化による女性の雇用拡大と教育拡充期（第Ⅲ期）、高度な人材育成のための高等教育改革と女性の雇用および教育の拡充期（第Ⅳ期）であった。本章での論述によって、各期で女子・女性の教育機会を拡大および拡充させることとなった要因は、それを促進するための政策にではなく、国民統合を目指すエスニック集団間格差是正策や、経済発展を目標とする人材育成策にあることが示された。

第3章「ペラ州における後期中等学校生徒の進路分化—質問紙調査の量的分析—」

本章では、マレーシアの後期中等学校の生徒が、何を動機とし、いかにして進路選択しているかについて明らかにした。第1次質問紙調査の結果から、既に先行研究で指摘されてきた（i）エスニック集団別の進路分化（「エスニック・トラック」）、（ii）性別の進路分化（「ジェンダー・トラック」）を、調査対象校3校においても確認することができた。加えて、（iii）エスニック集団別や男女別、学校種別による進路分化に対して影響を及ぼす要因には、学業成績などのメリトクラティックな要因だけでなく、エスニック集団別の性役割観というノン・メリトクラティックな要因も含まれると予見できた。また、（iv）マレー人の女子生徒の進路形成には、性役割観の及ぼす影響が大きかった。

第4章「ペラ州における後期中等学校女子生徒の性役割観と進路形成—面接調査の質的分析—」

本章では、第1次質問紙調査を補完するべく実施した第2次面接調査の結果に基づき、女子生徒の進路形成意識について検討した。そこで明らかになったことは、（i）女子生徒の性役割観に対する意見は複雑かつ多様であり、（ii）性役割観と高等教育との関係性は、エスニック集団間で全く異なるということであった。たとえば、マレー人女子生徒は、女

性（母親・妻）として性役割に忠実であろうと高等教育に進学するが、華人女子生徒は、自らの興味・関心や自己実現のために高等教育に進学しようとしていた。そして、(iii) 性役割観が職業選択に及ぼす影響にもエスニック集団間で大きな差異が見られた。マレー人女子生徒は、性役割観を尊重し、必ずしも高等教育卒業後の職業的成功を目指していないが、華人女子生徒は、性役割観と職業選択との関連性を認めず、自由な意思により職業選択し、高等教育卒業後の職業的成功も視野に入れて進路形成していた。さらに、(iv) 性役割観が高等教育選択や職業選択などの進路形成に及ぼす影響は、エスニック集団内部でも決して均質ではなく、階層間で顕著な差異が認められた。

第5章「ペラ州における青年期女性の進路形成と自己同定—追跡面接調査の質的分析—」

本章では、第3次追跡面接調査の結果を示し、後期中等学校修了後の青年期女性の進路形成に対する受容と葛藤について明らかにした。第3次調査は、第1次・第2次調査と同一の母集団を対象とした追跡面接調査であったが、その結果から、(i) 後期中等学校フォーム・ファイブ在学中に女子生徒が描いていた進路展望と、後期中等学校修了後に女性が実際に選択した進路とにはギャップがあり、(ii) ジェンダー要因、エスニシティ要因、経済的要因などのノン・メリトクラティックな要因と、学業成績などのメリトクラティックな要因とが複雑に交錯しながら進路形成に影響を及ぼしていることが明らかになった。そして、(iii) 様々な要因の影響により、進路形成の「理想と現実」との間にはギャップがあり、それに対する女性自身の自己同定のあり方も多様であった。

さらに、本章では、エスニシティ、ジェンダー、階層という分析カテゴリーにより、マレーシアの女性の進路形成と自己同定について5つの型に類型化した。従来のマレーシア教育研究において、進路選択に葛藤を伴うのは、ブミプトラ政策によって機会が制限されてきた華人女性のみであると論じられてきたが、華人女性についてもその全てが葛藤を抱えるのではなく、また、一部のマレー人女性にも葛藤が見られることなど、進路形成に対する自己同定の多様性を示すこととなった。

終章「結論、研究の意義と課題」

本章では、これまでの論述を踏まえて、女子・女性の教育機会の拡大および拡充の背景と要因を論じる上で、特に重要と考えられる以下の3点を、結論として挙げた。

(i) まず、結論の第1の点として、女子・女性の教育機会の拡大や拡充に影響を及ぼ

す各種政策の意義と限界について検討した。マレーシアにおいて、男女間の教育格差の解消に貢献してきたのは、女子・女性に対するアファーマティブ・アクションという「直接的」差別是正策ではなく、プミプトラ政策や人材育成策などの「間接的」差別是正策であった。具体的には、マクロ次元においては、国民統合のためのエスニック集団間格差是正策と経済発展を目指す人材育成策が、間接的に機能して、マレーシアにおける女子・女性の教育拡大を促してきた。その拡大の規模とスピードは、他のアジアの途上国に比べても遜色ないものであり、マレーシアの女性が、開発過程で重要な役割を担い、新たな雇用機会とより高い教育機会を得られるようにもなった。しかしながら、それぞれの政策が目指す一義的な目的は、あくまでも国民統合を目指すエスニック集団間格差の是正と人材育成であったため、全ての女性の教育機会や職業機会を無制限に拡大することはなかった。特に、エスニック集団間格差の是正という課題が重要視されたために、マレー人女性が、優先的に機会を供与されたが、その一方、非マレー人である華人女性等の機会をドラスティックに向上させるまでには至らなかった。また、高等教育段階における女性の割合は徐々に増加している反面、理工系の女性の割合は伸び悩んでいる。つまり、マレーシアにおいて、各種政策の影響を受けて全体としては男女間格差が解消されつつあるが、その陰で、ジェンダー平等の達成に向けては、まだ多くの問題が残されていると言える。

(ii) 次に、結論の第2の点として、ミクロ次元における女性の進路形成に対する自己同定という観点から、女子・女性の教育機会の拡大および拡充について検討した。その結果、女性の教育拡大の妥当性について評価する際に、マクロ次元における分析に加えて、できる限り個別具体的なミクロ次元の事例を収集し、それらを質的に分析することが重要であると筆者は考える。先行研究では、マレーシアの生徒は、各々が属するエスニック集団別や性別に典型とされる進路（「トラック」）を自ら選好すると論じられてきた。また、各々の進路分化が、ともすれば単なるエスニック集団あるいは男女の特性に基づく進路分化として、本質主義的に解釈されることも多かった。しかしながら、そのような解釈では、エスニック集団間や男女間の相違について個別に説明することはできても、同一エスニック集団内あるいは女性内部の進路形成の差異について十分に説明することはできないからである。また、多様な女子・女性の進路形成について実証的に検討することを通じて、性別役割観を守りながら、女性の高等教育進出をめぐる異なるベクトルを示す各国・地域の事例についても解釈することができる。とりわけ、本研究で取り扱ったマレーシアの事例は、非イスラームである欧米や日本のジェンダー論者・フェミニストが克服しようとした

「固定的（伝統的）性役割観」を残した形でも教育が尊ばれ、男女関わりなく教育機会を得ることができるという事例も存在することを教える。また、マレーシアにおいて、性役割観と人間平等観が理念的に並存する中で、女性の教育機会が拡大してきたという事実は、フェミニズムやジェンダー論が、固定的性役割観を強く否定する立場から、教育機会の男女平等を実現しようとしてきたことに疑問を投げかける。さらに、イスラーム的価値観に基づいた男女平等の理念が、マレーの慣習と融合しながら、欧米型の男女平等理念のあり方とは異なった形で多様に生成されるとすれば、その理念は、欧米型の男女平等の達成を向かうべき唯一の目標としてきた従来の研究に一石を投じるものでもある。

(iii) 最後に、結論の第3の点として、マレーシアのペラ州という1国1地域、2つのエスニック集団の比較から、他の国家や文化圏における女性と教育について、同一あるいは類似すると予測できる問題点を抽出し、どのような示唆を得ることができるかについて考察した。その結果、ジェンダー平等は、決して自明で画一的な目標ではなく、できる限り地域の実情に合うよう吟味されるべきであると筆者は考える。仮に、国際女子教育開発に関わる先行研究や政策実践の大半が、国際機関や援助国が提供する概念モデルに依拠していたとするならば、当該国や当該地域内部の多様性にも配慮しながら、文化的意味体系の中で女性の教育選択を捉え直し、効果的な女子教育支援策を提言することが、ジェンダー平等の達成に向かうために今後益々重要になると思われる。ジェンダーという概念そのものが、場や時間、コンテクストに応じて生成・変化しながら、文化的意味体系に応じて有効に機能する。それはとりもなおさず、比較教育学や教育社会学における女性・ジェンダーと教育あるいは国際女子教育開発の議論が、単線的な「男女平等」概念モデルを前提として成立してきたことを批判することにもつながると考える。

本研究は、途上国では例外的と言える規模やスピードで進行してきた、マレーシアにおける女子・女性の教育機会の拡大および拡充の過程と構造について、ジェンダーとエスニシティを分析視点として検討するものであった。国際女子教育開発における課題や目標が量から質へと、すなわち、男女間教育格差の解消からジェンダー平等社会の実現へとシフトする中で、本研究は、異なる国や地域の教育現象の優劣を論じるのではなく、あくまでも幾重にも連なる文化的意味体系を尊重しつつ、女性にとっての教育の意味を解釈することの重要性を強調してきた。今後も、ある文化的意味体系を、他者として外側から（あるいは上から）観察しながら、その意味体系を判断し評価することの限界を自覚し、ジェン

ダーやエスニシティという複合的な分析視点をを用いながら、女性と教育の意味について明らかにしていくことを課題としたい。